

| | |
|--------------|--|
| Title | <書評>川添登著 「東京の原風景」-都市と田園の交流-日本放送出版協会（NHKブックス）, 1979年（初版） 大阪都市環境会議編 「おおさか原風景」-水都再生へのパースペクティブ-関西市民書房, 1980年（初版） 風景デザイン研究室編 「京の原風景」-都市美-学芸出版社, 1980年（初版） |
| Author(s) | 向井, 正也 |
| Citation | デザイン理論. 1981, 20, p. 125-128 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52689 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

川添 登著

「東京の原風景」 一都市と田園の交流—

日本放送出版協会(NHKブックス), 1979年(初版)

大阪都市環境会議 編

「おおさか原風景」 一水都再生へのパースペクティブ—

関西市民書房, 1980年(初版)

風景デザイン研究室 編

「京の原風景」 一都 市 美—

学芸出版社, 1980年(初版)

ここ数年来、一般に文化財保全の掛声の高まりとともに、歴史的町並みの保全が全国各地で問題とされるようになって来ている。

面白いことに、こうした保存運動はどこかで、おらが町をもっとカッコいい魅力的なものにしようという、市民をも加えた都市の「修景」や「美化」の運動と例外なく結びつき、ますますその勢を加えつつあるようである。

ここに取りあげた三冊の近刊書も、もとよりそうした時代背景を反映するものと思われるが、三冊ともに「原風景」という言葉がタイトルにつかわれているのがいやに目につくことと思われる。

私がかここで欲張って三つもの書評をやらかそう、などという気になったのも、正直いって、いく分かは、こうした「原風景づくし」に惹かれたことにもよるが、だからといって、決して冗談ごとではさらさらありません。

いくなれば、この書評をとおして、「原風景」などというものを正面にすえたがる、今日のわが国の都市デザイン論のあり方を批判的に眺めてみたいと考えたからである。

そもそもこの「原風景」という言葉は、もうかれこれ一昔も前に、文芸評論家奥野健男が、文芸季刊誌「すばる」に連載した「文学における原風景」(後に集英社より出版、1972)

で用いた新造語で、奥野はこれを「文学者の自己形成空間である故郷の風土や、文学作品を支える〈原イメージ〉」だといひ、これを文学的創造の源泉として、作家の深層心理とのかかわりあいの上で論じている。

彼自身もみとめているように、この言葉は「その後間もなく流行語のようになって」しまったのだが、このカッコいい言葉を、そのカッコよさに惹かれて、最もひんぱんに用いたのは、他ならぬ建築家たちではなかったろうか。

だがともかく、こうして「建築」や「都市」との関連で重用された「原風景」は、その原義とは遠くかけ離れた、より浅い事物的な意味で勝手放題に用いられるようになるのも、また自然の成行きだったと思われる。

この三著にしてからがその例外ではなく、その「原風景」には別段深い意味がこめられているわけでもなく、それぞれ東京、京都、大阪の古きよき日の、或は昔なつかしい面影を残した風景についての、追憶、懐古、回顧、紀行のたぐいであり、それ以外の何物でもない。

別段そのことで、あれこれとがめだてしようというのではなく、それはそれとして、はっきりしておればいいのだが、大阪の場合は別として、他の二著では、そこまで割切れずに、何から「原風景」の原義に拘泥しているかに見えるところが夫々の言葉の上にあらわれている。それならそれで「都市における原風景」を「文学における原風景」との関連において論じているかというところでもなくて、もっぱらそれぞれの町の姿の「紙上復原」にこれつとめるといふあたりが何とも割切れない。ともに著者の問題意識が今一つ鮮明でなく、現実の町づくり運動ともつながりがどうも稀薄であるように思われる。

そうした中で、ともかく現実の市民運動をバックにしたものは「おおさかの原風景」で、その編者の「大阪都市環境会議」は、別名「大阪をあんじょうするための集まり」というのだが、本書の副題も「水都再生へのパースペクティブ」となっているので、さぞかし大阪のまちづくりについての緻密な計画や大胆な提案などが具体的に示されているものと思っただけ、そうではなくて失望した。

でも、こちらはさすがに大阪らしく、編者は原風景の原義なぞには拘泥しないどころか全く無知で、この言葉が上記の川添登の著書のタイトルから出たものなどと後書きに書くなど、ブンキなもので、このことで、編者たちの間で、「原光景」に対する「原風景」といった、心理学上の定義が問題になったなどとのべるあたり、およそその目当はつくというものである。

それにしても「大阪をあんじょうする」のに何故「水」にばかりこだわるのか。八百八橋の「水の都」が大阪の原^{もと}の風景だからなのか。でも「水」だけをとりもどしたって、そ

れで、大阪があんじょうなるわけのものでもなし、第一その「水」が果して何時、もと通りの姿になるものやら。これはもう絶望的に不可能なことだと思うのだから。

その点「京の原風景」は「原風景」を勝手に自己流に解したりなどせず、なるべく原義に即して考えて行こうとする意向のほどは、「風景デザイン研究会」代表、京大教授中村一によるまえがきにも明らかではあるが、担当の面々は、一応はその趣旨にそいながらも、事実上は、めいめい独自の「原風景」の解釈による、というよりは、やはりあまりこの言葉にはとらわれずに、京の都市美を専門の、造園をデザインする、創る側の立場から眺めている。

さすがに京大造園学科のOBたちという、その道の専門家集団だけあって、ちよつとわれわれ素人には気がつかないようなところにも鋭い目がそそがれ、みがきぬかれたフィーリングによるキメの細かい観察の集成として、下手をすれば京都の名所めぐりや歴史散歩のたぐいなど、観光案内に墮するおそれのある企画を、一段高い次元のものにまとめあげたことは高く評価されよう。

京をよく知るものにとつてすら、読んでみて新鮮で、教えられるところが多く、かつは楽しい読物となっている。ただ問題と思われるのは、やはり原風景についての問題意識が今一つ不明確であるところから、全体として、折角のタイトルをそれ程生かし切れなかったことと、もう一つ、造園術という立場からは、建築に関する記述については、「惜しむらくは兵法を知らず」のたぐいのもが、わずかながら散見されることである。例えば、六角堂界限を「世界に誇りうる都市景観」などうたうなどである。

最後に登場いただく真打ち川添登。これはもう建築や造園はもとより美術、デザインから諸芸万般何事でござれ、酸いも甘いもかみわけた超一流のベテランだけに、「原風景」の原義のことなど、かなり気にしながらも、その原義からあえてはなれて、かつて「田園都市」だったという江戸や明治の東京の、緑あふれる景観のありようを微に入り細を穿ってたんねんに説きあかしてくれるのには驚かされる。「よくもまあ遠い昔のことを、これだけわしくしらべられたものだ」というのがその読後感だが、同時にまた「何故こうもモノマニアックに造園関係にばかり執着したのだろうか」というのもいつわりのない感想である。

本書はこんなタイトルよりも、むしろ「東京造園物語」とでもした方がいいのではないかな。その記述のどこをとってみても、そこから江戸の町並みの原風景をしのぶよすがとなるものなど到底見出し得ない。これは建築家はもとより、造園家の目で見えた都市景観論ですらない。いわば植木職人の目で見えた「世界最大の村落」をめぐる、主として「花づくり」と「花見」に関する物語だといえよう。

もとよりそれはそれとしての評価は十分出来るには出来るのだが、これではやはり、タイトルの「原風景」が泣くというものだ。その点さすがに気になるものと見えて、著者は本書の末尾で「都市環境の蘇生をめざして」という、とってつけたような「結び」を、たった4ページほどつけ加えているのだが、ここではしなくも、みづからの都市論における問題意識の程を端的に示すことになった。

著者はここで、「自分は山崎正和氏のように〈東京は世界一美しい都市〉とまでいい切る勇氣はないが、それでもなかなか捨てがたい美しさをもった都市だ」とうそぶくとともに「人びとの江戸への根強い関心を、都市環境の蘇生へのエネルギーに転化していくべきだ」などという仕末である。

「都市環境の蘇生」というものが、こんな生つちよろい植木屋談義とは全く無縁のものであることは、同じくこれをタイトルにした京大教授末石磊太郎の著書（中公新書405, 1975）を見れば何よりも明らかであろう。



これからの都市デザイン論は、いわゆる「守る側」の保存論と、「創る側」の再生論とを、うって一丸としたものになるとともに、その筋の専門家だけではなく、一般市民をも加えた巾広い「まちづくり運動」として、単なる都市の景観形成の問題をも超えた生活環境論として機能すべきだと考えられる。それはもろもろの環境破壊による人間の身心を荒廃からまもることにはじまり、市民の文化的生活の向上に資するものでなければならない。もちろん、そうでない都市風景論や都市デザイン論があることも結構ではあるが、そういうものには「原風景」などという調子の高いタイトルをつけるのは差しひかえるべきではないだろうか。

この三著のように、原風景の原意からはずれた原風景論は、上述のような都市デザイン論の前向きの構えとは大きく喰いちがうものであり、この点私は奥野健男の「文学における原風景」にこめられた「原風景」の意味の方がむしろそのまま、これからの日本の都市デザイン論の思想的基盤として文化的に大きな役割をもちつづけるものではないかと考えるのである。

（向 井 正 也）